

成蹊會誌

2001.1 No.92



専務理事通信

加藤 節……2

特別企画・特別寄稿

座談会／昭和十年代の成蹊 先輩の回顧談 その二……4
 今後の政局の動向 安倍 基雄……8
 偏向しない正しいマスコミ報道 清原 武彦……12

随想

益子焼の今昔 塚本 央……16
 プレメ時代の思い出 湯川 佳宣……17
 46年振りの青春旅行 石田 恭一……18
 事故だ、電話だ、一一八番 角間 泰三……20
 世界の携帯通信動向 関田 晃嗣……22
 紐育辯護士奮戦記 村瀬 悟……23
 日本料理屋に生まれて 行形 和滋……26
 駆け出しキャビンアテンダント日記 桜 愛鯉……27

40年後の発芽／3 叙勲／3 表紙繪によせて／11

先輩起業家からのメッセージ／29

成蹊会ホームページ・Eメール／35 会員動静／48

物故会員／57 予告／57 第5回成蹊会学術賞／58

第40回謝恩顕彰会／59 成蹊学園の近況／62 学園史料館／68

学園旧図書館／70 成蹊会報告／71

表紙の題字は故上條信山先生、絵は有賀 勲(旧高・23年)

同窓のつどい

- 成蹊高校(旧制)創立75周年式典・祝賀会……30
- 九州支部創立50周年記念総会……32
- ヨット部創部50周年記念事業
 (全日本ヨット選手権大会主催)……34
- 恩師を囲んで……36
- 奥住学級クラス会 山形学級1回生クラス会
 藤井一美先生を囲む会……37
- 学校・年次会・ゼミOB会のつどい……37
- 新宿成蹊会 蹊水会 桃伍会 桃祿会
 旧高24回懇親ゴルフ会 高校15回ゴルフコンペ
- 体育会・文化会OB会……39
- 蹊声会有志箱根合宿 旧高OBラガー懇親会
 成蹊ラガークラブ懇親会……40
- 業界・企業・趣味のつどい……40
- 山武グループげやきの会……41
- 地域のつどい……41
- オーストラリア・クイーンズランド成蹊会
 上海成蹊会 山形成蹊会 新潟成蹊会
 栃木成蹊会 千葉支部総会 渋谷成蹊会
 大阪・奈良・和歌山成蹊会 長崎成蹊会
- 寮歌祭……45
- 日本寮歌祭 武蔵野寮歌祭 武蔵野寮歌祭参加記
 横浜寮歌祭 広島寮歌祭

先輩の回顧談

—その二—

昭和十年代の成蹊

出席者 清水 護先生(元旧制高校校長)
 谷岡喜久蔵氏(旧高・昭和13年卒)
 川村 次郎氏(旧高・昭和16年卒)
 松平 直寿氏(旧高・昭和19年9月卒)
 西村 洋氏(旧高・昭和20年卒)
 和男氏(旧高・昭和20年卒)
 司会 島尾 和男氏(旧高・昭和20年卒)
 二〇〇〇年八月九日
 於 成蹊会・応接室



司会 成蹊会誌の前身に旧制高校創立七十五周年記念事業の一つとして、「先輩の回顧談」その一「昭和初期の成蹊」を掲載しましたが、今回は昭和八年から旧制高校の終焉まで英語の先生をなさり、九十二歳のご高齢で益々お元気な清水先生を囲んで、主に昭和十年代の成蹊について回顧をお願いします。清水先生から口火を切って頂きます。



清水 護先生

浅野校長時代と土田校長時代

清水 大学を卒業してから三年目の昭和八年に成蹊の英語の教師になった。同じ時に飛田隆先生と、後に「萬緑」で有名になった中村先生が国語の教師として来られた。当時、校長は悠揚迫らぬ風貌の浅野孝之先生で、そのおだやかな教育理念と実践によって、先生は全学園の希望を担っておられた。しか

し、しばらくして、先生が体調を大きく崩されたのが転機となり、昭和十二年九月まで勤められた後、土田誠一先生と交替されることになった(昭和二十年九月まで)。

新校長は就任後の最初の職員会議を十五分をこそで散会されたので、一同驚くとともに、もし万事この調子ならば、と前途に懸念を抱く人もなくはなかったが、よく接するうちに、教育者として慈父の如き面も持っておられることがわかってきた。同時に、信念を貫く実行力があり、どしどし自分の考えで事を進められ、一年後の昭和十三年には構内に報命神社が、ついで本格的に日本刀鍛錬場まででき、学校はどんどん変わっていった。



谷岡喜久蔵氏

古き良き成蹊

谷岡 私は昭和三年小学校四年に編入し、十三年高等科を卒業した。卒業証書の校長名は土田先生だが実質的には浅野校長のもとで、本誌前号で諸先輩が語られた「古き良き成蹊」で育った。

八万坪の校地で、小学校、尋常科、高等科合わせて八百人足らずの児童生徒が、後から思えば生徒にはもったいないような良師と施設に恵まれ、十三年間

の一貫教育で中村春二先生の教育理念を実施した学園の十年を過ごした。

成蹊の制服の文科の襟章は浅野校長のお考えでラテン語のアルスに由来するAだった。旧来のいわゆるナンバースタールなどで、他校は全てリテラチュアなどで、インターハイなどでこれらの連中と付き合つと、Aをアグリカルチュア、農科と間違えられたりした。多勢に無勢、浅野先生にも妥協して頂き我々の時代から襟章はしに変わった。



川村次郎氏

浅野時代から土田改革期

川村 私は昭和九年、東京女高師(現 お茶の水女子大)付属小から金谷(旧姓青木)、中島、松本の三君とともに尋常科に入学した。クラス担任は清水先生だった。成蹊の教育に憧れたわけではなく、母が兄たちの高校受験浪人で苦勞し、七年制

高校の受験を望んで受験し、合格したためである。動機はともかくも、卒業してみると成蹊は懐かしい。中村春二先生との縁は、先生の末子故文雄君が同級生だったことだけだ。浅野先生については、朝礼で鐘を叩かれて心力歌の歌い出しをされた程度の記憶しかない。入学の翌年三月、旅行部(現山岳部)員でない私が、尾瀬行きに尋常科一年から一人だけ参加させて貰ったが、途中で「浅野先生重態、東京へ帰れ」の電報があり帰京した。

谷岡 浅野先生は急性膵臓炎で慶応病院に入院され、一時は重態という事で、先生を慕う生徒も父兄も大変心配し、輸血を申し出る生徒もいたが、幸い四月には回復された。

川村 高等科は土田先生による改革の時期で、一年の全員が明正学寮に二回生として入寮した。南寮には文乙と理乙、北寮には文甲と理甲、それぞれの寮が二階建て六室で一室六人、一階が学習室、二階が寢室、舎監は尾崎先生だった。

十四回生の寮における忘れられない出来事は、記念祭中止を不満に思った我々が、寮の前の

広場で焚火をした上、鈴木生徒課長の校宅へストームをかけたという事件。

土田先生について悪い思い出はない。先生はいつもフロックコートをきておられた。寮の親睦会で神道を茶化す劇をしたところ、最後までじっと見ておられた土田先生は、終わってから大きな爆弾を落とされた。先生の教育法の一面を窺わせるなされ方だった。

旧制高校のシンボルのように言われる白線帽はマントが成蹊高等科で使われ始めたのは私の高等科時代からだ。自身は帽子の白線無し、外套は旧来のトレンチコートが続けたが、規則で白線は付けざるを得なくなっ

た。

昭和十四年から始まった高等科一年六月の伊勢神宮参拝旅行では鮎の泳いでいる五十鈴川で禊ぎをした。

川村、司会 私も禊ぎをした。



松平直寿氏

浅野時代から土田時代

松平 小学校から成蹊で、六年の九月までが浅野先生、尋常

科が土田体制ができあがる時期で、二年のとき日章旗に代わる校旗として、八咫鏡を象った縫い取りの「護皇旗」、次いでその副旗として白地に啓行を記した「啓行旗」が制定され、教練の分列行進のときなどに使われた。三年の時には記念祭が勸学祭と改められた。中村教育の伝統の作業は残されていて、同年の九月に、我々も建設工事を手伝ったプールが竣工した。

高等科では土田一色で土田先生の改革の速さがわかる。高等科一年では明正学寮に入寮したが、夏休みの八月、北寮に火災があり、家が近かったため消火に駆けつけたが全焼したため、寮生活は半年足らずで終わった。

昭和十四年から始まった高等科一年六月の伊勢神宮参拝旅行では鮎の泳いでいる五十鈴川で禊ぎをした。

川村、司会 私も禊ぎをした。

松平 神宮で円座に座らされた時の白装束は今も家にある。楠公祭では清水先生と同じ様な経験をするなど、甚だ申し訳ないが土田先生にはついて行けないという印象だった。偶然だ

がつい先頃亡くなられた先生のご子息や現在早大教授のお孫さんとはずつとお付き合いがあり、今しているボランティア活動ではお孫さんとは理事仲間である。

二年のとき、文科学生の徴兵猶予期限が短縮されたため、操要学級(現帰国子女のための国際学級)からの編入で同期となったが年長の松本、竹岡、山本三君が徴兵され、十一月十八日出陣の壮行式がおこなわれた。

司会 このとき、中村草田男先生は「勇氣こそ地の塩なれや梅真白」の句を餞とされました。また、三君の武運を祈って全校の先生、生徒が署名した日章旗が贈られました。

その中の、翌年硫黄島で戦死された竹岡さんに贈られたものが学園史料館に保存されています。

松平 高等科の勤労働員は我々の学年からで、三菱の大船工場に行った。また戦時体制強化のため二年前から修行年限が半年短縮されていたため、我々は昭和十九年九月に卒業した。



西村 洋氏

尋常科、高等科 土田時代

西村 武蔵野第一小学校から昭和十四年尋常科に入学した。高等科の修業年限は更に短縮され、二年で卒業させられた。尋常科の時は山歩きや陸上競技部の部活動を楽しむことができたが、高等科では、学校で満足な授業があったのは一年のときだけで、二年では全員が三菱重工業東京機器製作所下丸子工場に勤労働員された。二交代勤務のため大部分の者が工場内の寮で合宿した。幸か不幸か、八月に寮が原因不明の火災で焼失したため、合宿は終わり通勤となったが、引率者だった清水先生は火災の後始末に大変なご苦労があったと思う。同期生のこのときの思い出の記が本誌の前身に載っている。

い思いで見回ったことを思い出す。

西村 僅か二年の高等学校の生活が学業を殆どしないで済んでしまうことに、日本の将来を担う学生がこれでよいのかと、大きな疑問を感じながら、激しくなった空襲のため、入学試験施行不可能、書類審査だけで昭和二十年四月大学に入学した。一年下の学年から修業年限は元の三年に戻ったので、我々の学年が最も大きな影響を戦争から受けたことになる。

成蹊教育を貫く 基本的なもの

谷岡 清水先生や後輩諸君のお話で現象的には浅野時代、土田時代と年とともに変化はあったけれども、池袋時代に始まった中村先生の成蹊学園建学の理念である、個性尊重とか人間教育という精神の流れは、旧制高校の二十五年を通じて、いわば伏流水のように流れていたと考える。建学の精神があっても、経営が成り立たなければ学園は運営できないが、岩崎さんと今村さんが中村先生と同窓の友情で経営を支えて、設備を整え、教授陣に人を得て、師弟同行の少

人数教育があったからこそ旧制高校から多くの人材を世に送り出すことができたと思う。小学校から大学、大学院まで一万人の学生を擁する現在の学園にもこの流れを絶やしてはいけないし、流れていると考えたい。これなくしては成蹊学園の存在する理由が無くなる。

松平 山岳部OB会の会長をしていただくため、成蹊の現役とも話す機会が多いが、成蹊大学と旧制高校では雰囲気にかんがりのギャップを感じる。時代の違い、規模の違い、それに伴う教育の在り方の違いなどから生じる困難を克服しないと、このギャップを埋められないように思う。旧制の伝統が大学に残っているのか、それとも高校に残っているのかを判断するのに逡巡するところがある。

西村 陸上競技部では、我々と現役のつながりがかなり良いのではないかと考えている。

谷岡 旧制高校の時代は留年に対する考え方はおろかだった。柔道部の後輩で良くできる人が担任の先生に自分で留年を願い出したことがある。浅野先生は威風堂々辺りを払う風格だったが、「罪あればわれを咎めよ天つ神 民はわれの生みし子なれば」とおっしゃり、落第で生徒を放り出すなどは以ての外、誠心誠意自分の及ぶ限りの面倒を見るのが浅野精神だと聞かされた。

谷岡 点数の最も厳しかったのがドイツ語の倉石先生だった。毎時間試験をして点数順に答案を返し、最後の方では「お前は劣等生」などと言われた。これは伝聞だが、漢文の尾崎先生が、「人間はドイツ語だけではない。貴方は落とすことに興味を持っていないのか」とたしなめられたと言った話もある。

川村 同期の文乙の連中は「倉石先生の三年間だった」と言っていた。私は理乙なのに幸い一度も倉石先生には習わずにすんだ。

運動部のこと

司会 記録によると馬術部が昭和十三年インターハイで優勝しています。インターハイは戦争のため十八年から中止されたようですが、この時代の運動部の活動について触れていただけませんか。

松平 伝統のあるバスケット、ラグビー、陸上競技部などの活躍が目立った。

川村 陸上競技部は昭和十四、五年頃が全盛時代だった。

西村 川村さん始め、同じ十四回の河田さんと新庄さん、十五回の川路さんなどの中距離での活躍には目覚ましいものがあった。

司会 清水先生は軟式野球部の応援歌の作詞をなさっていらっしゃいますが、ご記憶ですか？

清水 先日二十回の三谷君からその件で電話を貰った。硬式野球部についても同じ枠組みのものを作ってお渡しした。草川 信先生に作曲をどなたかを介してお願したものを（軟式の）部員は歌っていた。作曲のお礼を思っている内に草川先生がなくなられたのが心残り

だ。

川村 部歌の作曲と言えばラグビー部、陸上競技部、水泳部などの部歌を作曲されたドイツ語の片山先生が思い出される。

司会 柔道部の部歌の作曲は草川先生の息子さんで、谷岡悌三（十四回文）さんと小学校で同級の宏さんでした。

谷岡 草川先生には小学校、尋常科では酒井先生に音楽を習った。

戦争と学園

川村 私の頃は戦争が直接学生生活に影響することは無かったが、戦争を身近に感じたのは七回理乙の中村剛海軍軍医大尉が昭和十五年五月、海南島で戦病死されたことが講堂で知らされて皆で黙禱したときだ。

清水 昭和十二年上海で戦傷を負われ、陸軍第二病院で翌年一月に亡くなった寺田先生は真に立派な先生で学園で追悼の会があったとき、上官の方が寺田さんの為なら是非にと言って出席された。

西村 私宅に私が武蔵野第一小学校四年当時に行われた、寺田先生の武蔵野町葬の写真がある。学園葬はあったのだろうか。

司会 今日はお暑い中をお運び下さり、貴重なお話を有り難うございました。

【付記】清水先生を囲んで録音開始前の食事中から話が弾み、先生からはこの記録では割愛した旧制高校の諸先生のいろいろなエピソードを聞かせて頂きました。先生にお願いして本誌でご披露できればと思っております。

なお、去年の七月に学園理事長の諮問機関として設置された「成蹊学園二十一世紀構想検討委員会」が、中村春二先生の教育理念に遡った上で現状を分析し、十九回に及ぶ委員会で熱心に討議した結果が「二十一世紀における成蹊学園の新たな創造に向けて（答申）」として本年七月、理事長に答申されました。

か？
松平 昭和十八年頃からはゲートルを巻いて通学、和服を通しておられた倉石先生さえ国民服で登校された。
西村 昭和十六年十二月、開戦の日、担任の山西先生が朝礼後の教室で「日本は負ける」と明言されたのは、クラス一同皆よく覚えてる。
ただそのことを他言する者は一人もいなかった。
清水 ドイツ語の小島先生は戦後シベリアの収容所で戦病死された。そのほか百名を超える成蹊人が戦没されたのは痛恨の極みだ。

「高一」、学校の成績、師弟関係

谷岡 川村さんのころ「高一」というのはあった？
川村 私の学年にはなかった。

谷岡 当時、高等科だけの旧制高校には、中学五年を卒業して一、二年浪人してから入る人も多かった。成蹊のような七年制高校では尋常科四年修了で高等科に進む。

成蹊では、尋常科を終えたときの成績次第によって、「高

一」という制度を設けそのクラスに入れて、その後の一年間、担任の先生が中心になり面倒をみて、成績を認定して高等科に進めた。

毎学年十人足らずの「高一」がいたが、その中に、後に国家・社会のために活躍した人が多いい。家族的で人間的な成蹊らしい教育の成果だ。

清水 今の話は一例だと思うが、学校の成績は人間の評価については全く当てにならない。学校の成績はある時点でその時の基準（問題）による点数で、そんなものは社会に出ればご破算だ。

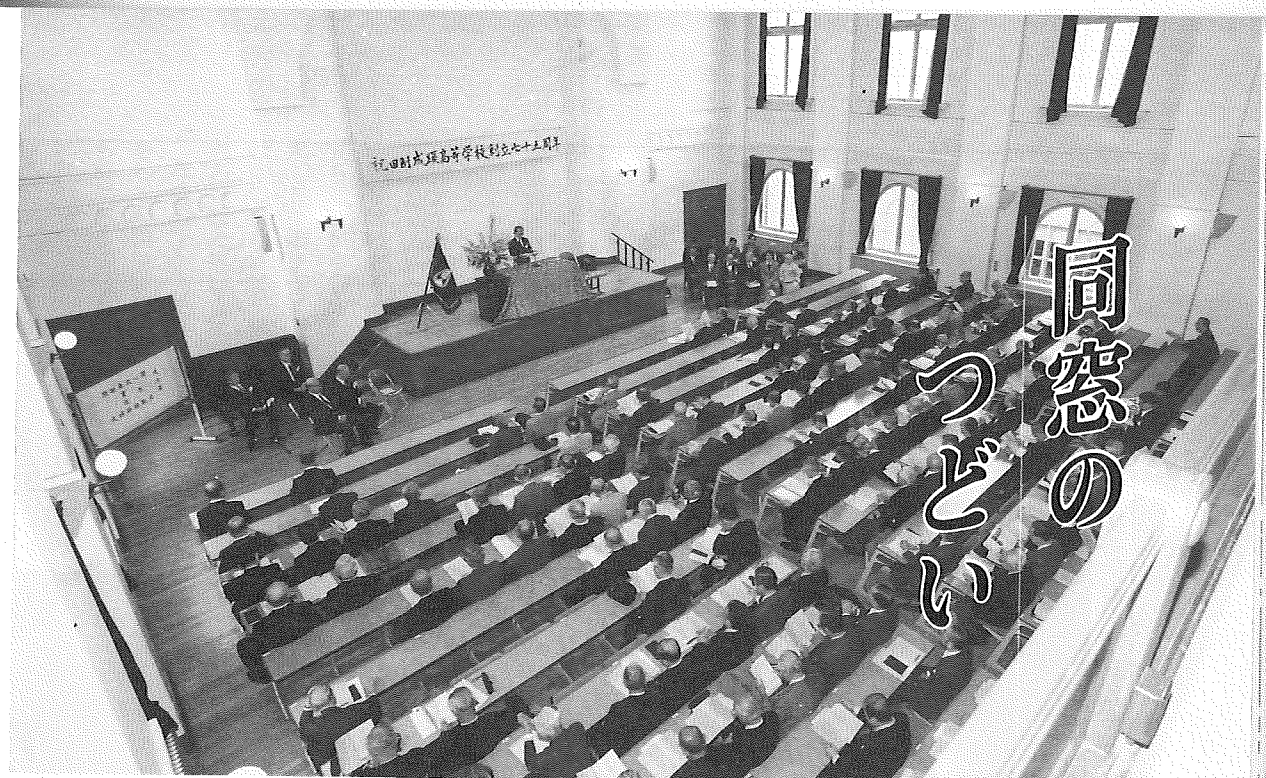
谷岡 そう言って頂くと有り難い。

清水 教師はともすれば、生徒を自分の学科の成績だけで評価しがちだ。私も若い頃はそういう傾向があった。生徒とその成長を見ている内にだんだんそうでなくなり、できない生徒を、将来どんなに偉くなるかと思いつながら見るようになった。それだけ自分が成長したと思いい、生徒のお陰と感謝している。生徒が自発的にある期間学業を離れる場合は別として、学校が二点や三点成績が不足する



司会 島尾和男氏





同窓のつどい

久し振りの講堂で式典

成蹊高等学校(旧制) 創立七十五周年式典・祝賀会

平成十二年十一月十二日。旧成蹊高等学校創立七十五周年記念式典が、午後十二時三十分から学園本館講堂で、つづいて祝賀同窓会が、一時三十分から大学一〇号館二階ホールで行われた。

大正十四年創立。昭和二十五年消滅。旧制成蹊高校の歴史は、そのまま昭和初期四半世紀の、激動の時代と重なっている。創立七十五周年ということは、同時に消滅五十周年ということでもある。

最も若い卒業生でさえ古希を迎えた。二十世紀末年のこの日、この記念式典は、旧制成蹊人が主催できる、最後の催しでもあった。

最後の卒業生が巣立って半世紀。この間の茫々たる歳月をひとまず消して、二百五十人を超すかつての若者たちが、続々と成蹊の、あの本館校舎の、あの講堂に集まってきた。白髪、禿頭が五十年の経過を物語っている。

成蹊・古代人の大集合である。五十余年ぶりに入った講堂の雰囲気は、往時とほとんど変わっていない。さすがに椅子は当世風になっていたが、天井、四囲の白壁、古典的設計の窓、そして講壇の位置も同じで、凝念用の鐘まで置いてある。

どこまでか、この日のための演出なのが知らないが、古代人を懐かしがらせるに十分の舞台装置といっている。

式は、横地孝・成蹊中、高校校長のリードで、心力歌第一章の唱和が始まった。

旧制二十五年間といっても、戦前の浅野校長時代、戦時中の土田校長時代、そして戦後、と大別され、そう簡単には一つにくれない。

島尾和男旧制同窓会長の式辞、来賓の旧制府立高校同窓会の楠川絢一さん、成蹊学園専務理事の加藤節さん、成蹊やよい会の島田喜久子さんの祝詞、貫洞哲夫旧制同窓会副会長の謝辞。それぞれに含蓄ある内容だったが、平等に省略させていただく。

祝賀同窓会
同窓会会場は、大学一〇号館。昔、四〇〇メートル・グラウンドのあった辺りか。一〇号館は、おそらく学園で最新、最大のモダンな建物か。なかなかの威容を誇っている。

と、昔に変わらぬ姿をみせてくれる。

西村洋旧制高校同窓会幹事長の司会で懇親会開始。

終戦直後の二十一年当時の校長・清水護先生が乾杯の音頭。九十二歳の英文学の泰斗の音吐は朗々と会場の隅々まで響いた。

諸氏による寮歌、校歌。ラグビー、陸上競技、柔道、水泳……往年の選手たちによる部歌。学習院、武蔵など、旧制七年制高校のゲストによる各校寮歌の披露など、色気のない「歌舞音曲」で型通り、しかし効果的に盛り上がりつつファイナルとなった。

杉山直樹(旧高・22年)

①この会は、旧制卒業生各世代から成る実行委員約五十人が、一年半かけて企画し練り上げたもので、記念募金については別項で報告されます。

②参会者に配布された「成蹊の歌」入手希望の向きは実費(一部千円、合送料)を添えて、成蹊会にお申込み下さい。

③当日の写真アルバムを成蹊会においておきますので、写真焼増ご希望の向きは来館の折にご注文下さい。(二月末まで)



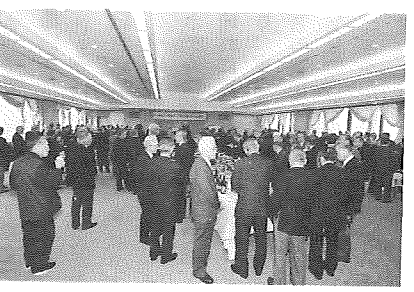
島尾会長式辞



心力歌朗唱



加藤学園専務理事祝辞



祝賀会風景



乾杯・恩師清水先生



寮歌高唱



第一回卒業生宗像先輩挨拶



戦没者を偲ぶ



受付風景



島尾会長式辞



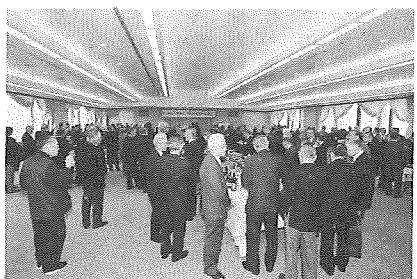
心力歌朗唱



加藤学園専務理事祝辞

島尾和男旧制同窓会長の式辞、来賓の旧制府立高校同窓会の楠川純一さん、成蹊学園専務理事の加藤節さん、成蹊やよい会の島田喜久子さんの祝詞、貫洞哲夫旧制同窓会副会長の謝辞。それぞれに含蓄ある内容だったが、平等に省略させていただく。

祝賀同窓会
同窓会会場は、大学一〇号館。昔、四〇メートル・グラウンドのあった辺りか。一〇号館は、おそらく学園で最新、最大のモダンな建物か。なかなかの威容を誇っている。
秩父連峰、高くそそる筑波。かつては、グラウンドから一望できた四囲の山並みが、十二階のホールまで上がってくる



祝賀会風景

と、昔に変わらぬ姿をみせてくれる。
西村洋旧制高校同窓会幹事長の司会で懇親会開始。
終戦直後の二十一年当時の校長・清水護先生が乾杯の音頭。九十二歳の英文学の泰斗の音吐は朗々と会場の隅々まで響いた。

第一回卒業生の宗像英二氏も九十二歳。断食会、肝試しの思い出などを語られた。
約一時間は、懇談、また懇談。いくつかのテーブルには、和・洋・中の料理と酒類が、老人にはちょっと多すぎる程度の適量で配置され、ほどほどに手がつけられていく。
そして後半。寮歌祭の実行委員ら、赤い法被に白縁帽の有志



乾杯・恩師清水先生

諸氏による寮歌、校歌。ラグビー、陸上競技、柔道、水泳...と往年の選手たちによる部歌。学習院、武蔵など、旧制七年制高校のゲストによる各校寮歌の披露など、色気のない「歌舞音曲」で型通り、しかし効果的に盛り上がってフィナーレとなった。

杉山直樹(旧高・22年)
①この会は、旧制卒業生各世代から成る実行委員約五十人が、一年半かけて企画し、練り上げたもので、記念券金については別項で報告されます。
②参会者に配布された「成蹊の歌」入手希望の向きは実費(一部千円、含送料)を添えて、成蹊会にお申込み下さい。
③当日の写真アルバムを成蹊会においておきますので、写真増強ご希望の向きは来館の折にご注文下さい。(一月末まで)



寮歌高唱



第一回卒業生宗像先輩挨拶



同窓のつどい

久しぶりの講堂で式典

成蹊高等学校(旧制) 創立七十五周年式典・祝賀会

平成十二年十一月十二日。旧制成蹊高等学校創立七十五周年記念式典が、午後十二時三十分から学園本館講堂で、つづいて祝賀同窓会が、一時三十分から大学一〇号館二階ホールで行われた。

大正十四年創立。昭和二十五年消滅。旧制成蹊高校の歴史は、そのまま昭和初期四半世紀の、激動の時代と重なっている。創立七十五周年ということも、同時に消滅五十年ということでもある。

最も若い卒業生でさえ古希を迎えた。二十世紀末年のこの日、この記念式典は、旧制成蹊人が主催できる、最後の催しでもあった。

記念式典
最後の卒業生が巣立って半世紀。この間の茫々たる歳月をひとまず消して、二百五十人を越すかつての若者たちが、続々と成蹊の、あの本館校舎の、あの講堂に集まってきた。白髪、禿頭が五十年の経過を物語るている。

成蹊・古代人の大集合である。五十余年ぶりに入った講堂の雰囲気は、往時とほとんど変わっていない。さすがに椅子は当世風になっていたが、天井、四囲の白壁、古典的設計の窓、そして講壇の位置も同じで、凝念用の鐘まで置いてある。

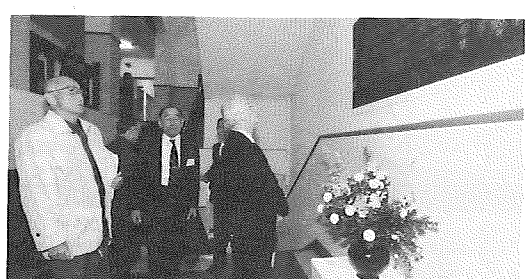
どこまでか、この日のための演出なのが知らないが、古代人を懐かしがらせるに十分の舞台装置といっている。

式は、横地孝・成蹊中、高校校長のリードで、心力歌第一章の唱和で始まった。

旧制二十五年間といっても、戦前の浅野校長時代、戦時中の土田校長時代、そして戦後、と大別され、そう簡単には一つにくれない。

心力歌も土田時代以降はまったく唱和されず、旧制全世代になじみ深いわけではなかった。しかし校歌の一節に生きつづけているように、成蹊の象徴の一つとしていまなお大事にされているようだ。

戦前の浅野校長時代、戦時中の土田校長時代、そして戦後、と大別され、そう簡単には一つにくれない。



戦没者を偲ぶ



受付風景